

南インド旅行：雑感

神奈川大学名誉教授

秋山 憲治

2025年1月14日～26日、南インドを旅してきた。ベンガル湾側のチェンナイ（旧マドラス）から入国し、インドの最南端のコモリン岬やアラビア海側の町をバスで巡り、最後は内陸部の大都市バンガロールから帰国した。ヒンドゥー教寺院やインドの自然などを巡るツアー旅行ではあったが、インドの社会も垣間見た。以下、インドで見たこと考えたことなど雑感を記したい。

*カースト制度

インド社会はカースト制度を抜きにして語れない。カースト制度はヒンドゥー教の教義と結びついた身分制度であり、ヒンドゥー教徒の職業や身分が階層によって決められ、人々の生活を規制する。

カースト制度の階層は、バラモン、クシャトリヤ、ヴァイシャ、シュードラという4つの階層から構成される。この枠から外れる最下層の不可触民と呼ばれる人びともいる。最高位のバラモンは司祭階級で、次にクシャトリヤは王族や武士階級で、次いで、ヴァイシャは商人や生産者、庶民階級、最下層のシュードラは、専ら肉体労働に従事する隷属民である。

現在、憲法で「カーストによる差別」は禁止されているが、カースト制度そのものは残っており、どの階層に生まれたかで、その所属は決められ、職業や身分が限定される。結婚も自分の属する階層内で行われる場合がほとんどで、親による見合い結婚である。カースト制度はインドの社会や人々の生活を規定している。

カースト制度から抜け出すには、イスラム教やキリスト教など他の宗教に変える方法があるが、自己の宗教を変更するのは、なかなか難しい。特に、貧困層にとっては、生まれながらのヒンドゥー教の教義から脱却するのは困難である。

しかし、1970年代以降、市場経済化や経済成長に伴い、近代化や都市化も急速に進展した。労働市場も自由な職業選択が可能になり、世襲的職業の継承といった従来のカーストによる制約も成り立たなくなってきた。また、下層のカーストに属する人々に対し、教育機関への入学の優先枠や国営企業職員の優先就職枠など優遇措置が設けられており、労働市場ではカースト枠を超えた人々によって担われるようになってきている。労働市場のカーストを超えた流動化が起こっている。

しかし、カースト制度そのものはなくなる。ヒンドゥー教徒である限り、生まれ持った階層はそのままであり、上位の階層の男性と最下層の女性が結婚するという事は非常に稀でマスコミ等で報道の対象になるという。カーストにより制限された身分や職業に基づく差別意識は簡単にはなくなる。

*情報技術（IT）の進展とインド

1970年代には、アメリカ・シリコンバレーで既にインド人ソフトウェア技術者が活躍していた。また、1980年代にはインド本土においてもアメリカ企業の下請け業を引き受け始めた。インドには、英語を使え、数学や物理などの得意な人材も多く、安価でIT業務の技術者がいた。また、アメリカとインドは時差が昼夜逆転しているため、アメリカ企業はIT業務の一端をインドにアウトソーシングしやすかった。インドとアメリカは相互に昼夜の補完関係を作り、効率的にIT業務を活用できた。1990年代に入ると、社会主義圏の崩壊により、ITが民生技術として、市民社会に入ってきたので情報技術は急速に発展していった。インドでもITが社会で活用し始める。

IT技術者が、カーストの枠を超えて活躍してきたが、依然として、カースト差別は残ってい

る。IT関係者は上位カースト出身者の比率が高いし、企業内での昇進や起業などで優位な状況は変わっていない。最下位のカースト出身者がIT事業に従事するのは難しい。

経済の成長・発展とともに、労働市場がカースト制度の枠を超えて流動化し、職業選択の自由化が進んでいるが、依然として、差別はあり、最下層のカーストの人々は、貧困や不十分な教育などでその恩恵にあずかされていない。

*インド社会のスマホの保持

多くの市民がスマホを持つようになった。政府は、2009年インド版マイナンバー制度「アール」を導入し、インドのデジタル・インフラとして整備された。現在、13億人以上がIDを保有している。マイナンバーを保持していれば、銀行口座を持つことが可能になった。極端に言えば、ゼロ円でも口座を開設できる。銀行口座の開設により、スマホを持てるようになり、各方面と交流、情報収集などもできるようになった。私的利用のみならず、市場での情報収集・交換など経済活動でも活発に活用できる。

スマホによるキャッシュレス化が進んでいる。QRコードも露店でも見かけた。現金でなくデジタル決済は、ビジネスへの活用や市民の日用品の購入など経済への活用が可能になり、現金決済が消えつつある。政府も現金紙幣の発行を抑え、国民や企業の金融状態を簡単に把握でき、自立した決済網を確立したいと考えている。

*交通状態

一般市民の足は、バイクである。バイクは小回りが利くため、若者を中心に利用されている。親子4人で乗っているケースも見かけた。また、三輪車のタクシーも多く、庶民、また観光客の足となっている。三輪車は、私が子供のころ見たミゼットと同じタイプである。しかし、4、5人を簡単にのせて走っているので、エンジンも幾分大きいのであろう。私が50年前インドを訪れた時は、人力車が中心であったが、今は、車社会となっている。

車は、日本車、韓国車、欧米車、国産車と多種見かけた。トヨタや欧米車は高級車として、スズキの軽自動車は、庶民の車として、また、EV車もあり、充電器を備えたガソリンスタンドも見かけた。モータリゼーションは、混雑、渋滞を日常化しており、排気ガスがスモッグの原因となる。地方都市は、バイクが主流であるが、大都市のバンガロールの渋滞はひどかった。

今回は、バスでの移動であったが、道路は基本的に舗装されていたが、十分整備されていないところもあった。高速道路もあったが、一車線のところもあり、有料道路もあった。

*おわりに

インド大陸の最南端の海岸線をバスで走っていると、小さな小舟で漁業し、砂浜の小さな掘っ建て小屋で生活している人々を見かけた。漁業を生業とするように決められたカースト以下の人たちであった。

一方、バンガロールはITで有名で高層ビルが立ち並んでいる。IT企業の楽天の高層ビルもあった。裕福な人々が生活し、数理関係の超優秀な学生の集まる工科大学もあり、発展するインドを象徴する大都市となっている。

50年前私が訪ねたインドは混沌たる状態であったが、現在のインド社会は、経済成長を遂げ、ゆくゆくは、中国やアメリカを超える経済大国になるだろうとの予想もある。しかし、差別のあるカースト制度や経済成長から取り残される人々も多く存在し、国民の経済格差も拡大すると考えられる。今後、人口世界1位のインドが順調に成長・発展するかどうか見守りたい。

以上



庶民の足の三輪タクシー



電気自動車の充電器



スマホで写真を撮る人達



QRコードによるキャッシュレス決済

